

# 人・牛・馬が行き交う「陸の道」

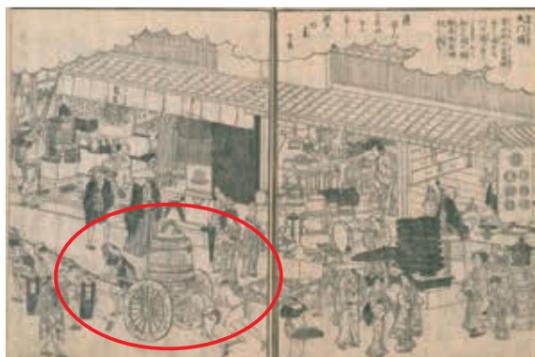
日本橋を起点とした5つの街道が整備されると、江戸から地方、地方から江戸へと、たくさんの人や物が行き来するようになった。今のように電車も自動車もないので移動の基本は徒歩だが、荷物運びには牛や馬が活躍した。

なんだかとてもにぎやかだね。



## 江戸の町の運送手段

地方から江戸に入ってくる荷物は船で大量に運ばれた。江戸近郊からは牛や馬に積まれて陸路で運ばれた。江戸の町では大八車や人が担いで運ぶすがたも見られた。牛車や大八車を使用するには、幕府への登録や許可が必要だった。



江戸の大門通りのようす  
人でにぎわう町のなかを、大きな荷物を乗せた大八車が通る。



馬  
荷物を運んだり人を乗せたりした。江戸市中では町人が馬に乗ることは禁じられていた。

大八車  
荷台にたくさんの荷物を乗せて2〜4人で動かす。前の人が車を引き、後ろの人が押した。

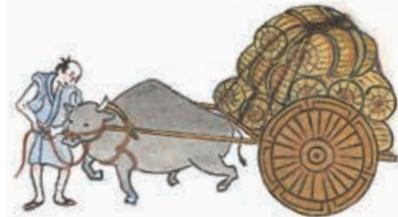
牛車

かご

日本橋から東海道の品川宿の手前の芝川町(現・港区高輪)には、牛小屋や運送業者が並んでいて、高輪牛町とよばれた。船で荷物を運ぶにも都合のよい場所だった。

## 荷物運びは牛におまかせ

俵やたる、材木や石材など重いものを運ぶときは、牛車が多く使用された。牛車は、江戸、京都、駿府(現・静岡県)、仙台など限られた地域でしか使われていなかった。



町の真んかに牛置き場  
江戸橋の南側にある江戸橋広小路(→p.32)には牛置き場が設けられていた。牛置き場は八丁堀にもあった。

## 交通事故が多かった

江戸の消費が拡大して荷物の運搬が多くなると、牛車や大八車などの交通量が増えた。すると、車同士、のしょうとつや、人がはねられたり、家がこわされたり、交通事故が増えて問題になった。



## 人は徒歩か「かご」

江戸時代の人はどこに行くにもよく歩いたが、「かご」を利用する人もいた。一般的にかごは出入り口にあるすだれを巻き上げて乗り降りするもので、將軍や大名など身分の高い人が乗る入り口が引き戸になっているものは、「乗物」とよばれた。

ぼくも乗せてほしいなあ。



四つ手かご  
町人が利用する一般的なかご。



金のかざりなどが施された。  
女のりもの  
身分の高い女性が乗った高級なかご。



かつぎ棒はここに通す。

権門かご  
大名の家臣や武士が利用した。名前に「かご」とつくが「乗物」の種類の1つ。

## 宿場から宿場へ

### 馬でリレーする「伝馬」

幕府や大名の荷物や書類を遠くへ運ぶときには、「伝馬制度」が利用された。街道に一定の間隔で宿場を設け、人や馬を配置して、宿場ごとに人と馬を交替して運んだ。江戸時代の中央区には、大伝馬、小伝馬、南伝馬の3つの伝馬役所があり、人や馬を準備して幕府のために手配する役職の伝馬役が住んでいた。

街道の宿場にある問屋場という事務所で荷物を下ろし、人も馬も交替する。絵は藤枝(現・静岡県)のようす。



## 飛脚は江戸時代の

### 郵便配達人

手紙や小物を運ぶときには、飛脚が活躍した。飛脚には幕府の経営で宿場ごとに人を交替させながら運ぶ継飛脚、各大名がそれぞれ利用した大名飛脚、民間が経営し、一般の人が利用した町飛脚(定飛脚)があった。

### 江戸から大坂へ約6日で届けた

継飛脚の場合、宿場ごとになんんかにかに交替して運ぶが、江戸から大坂まで、早ければ3日、遅くとも6日以内に届けるのが一般的だった。町飛脚は料金によって日数もちがいが、安い便では20〜30日くらいかかった。



日本橋左内町(現・日本橋一丁目)にあった和泉屋甚兵衛という町飛脚の日程表。江戸から大坂への出発日が書かれている。



御用箱  
幕府からの手紙を入れた箱。なん日までに届けるという指示もついていた。

幕府が発行した定飛脚の営業許可書

継飛脚  
2人一組で交互に走った。1人が鈴を鳴らすか、かけ声を出し、夜はちようちんで道を照らしながら、次の宿場まで寝ずに走った。



町飛脚(定飛脚)  
手紙や小物だけでなく金品も運んだ。各地に飛脚問屋が設けられていた。馬を使って運ぶこともあった。